

九州本部拡大委員会開催



2月8日12:00より、長崎ブリックホールにて、九州本部拡大委員会が開催され、博多地区本部から、萩原弘司氏(博多車掌区)に議長を務めていただきました。やはり、議題として真っ先に上がったのは、去年の年末手当の低額回答。コロナ禍の中での減収はあるものの、会社発足後、利益が上がる中でも賃金、一時金が抑えられ内部留保が積み上げられる中で会社は「ボーナスは業績と連動していない。安定供給が基本である」としてきたが、結果、1.2カ月分という低額支給がなされ、どの職場においても、所属組合を問わず不満が渦巻いているとのこと。(当然ですよ。)また、ダイヤ改正では、筑肥線の6両ワンマンなど様々な合理化が提案されており、乗務員の勤務体系においても、6時台の出勤で28時間も拘束されたり、車内の清掃や乗泊の清掃を指定されたりと、安全面、精神衛生面での不安は増加する一方であるとの声も上がりました。(働き方改革って、一体何なのでしょうね。)しかし、この厳しい状況でも、常に問題意識を持ち、ひとりひとりが声を上げていくしかない、という前向きな集約のもと、最後は恒例の「団結ガンバロー!」で締めくくりました。

青年のひとりごと

「多数派」が「少数派」を糾弾するのは、よく見られる事象です。私もごく稀に経験しますが、これが意外と煩わしい。「多数派とは、自分たちを多数派として認めさせることに成功したひとびとである」(J.S.ミル「自由論」より)。当然ですが、人の生き方というのは、綺麗に同数に分かれるはずもなく、必然的に、「多数」「少数」の違いというのは出てきます。「派」で括ること自体、どこかズレている。これは、言ってしまうと「リンゴとミカンどちらが好きか」という次元の話であり、他でもなく自分の考えで選んだ結果に過ぎず、優劣をつける性質のものではありません。そのため、本来、「数」が多いことを理由に、自分たちとは違った考えの人間に対し強気に出るのは筋違いとしか言えないのですが、そうした態度に出してしまうのは、自分自身が「人と違うこと」を恐れている何よりの裏付けです。要するに、「みんなと同じ」でなければ安心できない。自分で考えて物事を決断することを放棄し、その殆どを他者に委ねてしまうほどの小心者で、自らの意思による試行錯誤のもと何かを体験することもないため、いつまでも「自信」が得られず、結局は、「少数派」を貶めることで見せかけの自尊心を保つしかないわけです。多数決の原理というのは、小学校の学級でも用いられるほど一般的ではありますが、それはあくまで、優劣のつけ難いものを便宜的に選択するための手段です。もっとも、小学生の場合、教室では「みんな同じ」であることが基本原理であるため、多数決の結果をあたかも優劣の問題であるかのように錯覚してしまうのも理解出来ますが、責任能力のあるはずの大人が同じような錯覚を起していたら非常にまずい。「数」にもものを言わせて、「自己主張」をしてくる大人というのは、貧相で抜け目しかないその精神構造から、良識に基づいた判断が出来ていないのはもちろん、何か問題が生じた際の責任を取るといった「自分だけ違うこと」を断固拒否します。相手が信用できる人間か否かを見分けるのは、案外簡単に出来るものです。

○当面する行動

- 3月13日(土) 15:00~/被災10年3.11さよなら原発福岡県集会 中小企業振興センター
- 3月14日(日) 13:00~/3.14福岡県総がかり集会 冷泉公園